

2018. 11. 22 (木)

## いのちのことについて語るときに僕の語ること

中野 康人

### 心臓のこと

この前の日曜日に、神戸マラソンというイベントがあって参加してきました。フルマラソンです。フルマラソンは、皆さんも何キロかご存じだと思いますが、42.195キロです。関学を起点にすると、梅田まで最短距離で歩いて17キロぐらいですので、行って帰って34~35キロで、あと7キロぐらいあります。三宮も大体それぐらいです。来る前に調べてみますと、関学を起点に京都の桂川くらいまでで42キロぐらいになります。逆に東に行くと明石くらいまでが42キロです。

この神戸マラソンは今年で8回目です。第1回は2011年でした。私は2011年、ちょうど40歳になる年だったので、何かチャレンジしようということで、初めてフルマラソンを走り、それから毎年、今年の第8回目まで、一年に1回だけ真面目になる日ということで走っています。

神戸マラソンのコースは、三宮をスタートして、そこから西のほうにずっと真っすぐ行って、長田の辺りを通って明石海峡大橋の麓辺りで20キロぐらいになるので、そこからまた折り返してきて、須磨の水族館の前を通ってポートアイランドでゴールをするという

コースになっています。

ポートライナーに乗っていただくと、横に、橋、というか高速道路のようなものが見えると思いますが、浜手バイパスという自動車専用道路を最後に走ります。いきなり30メートルぐらい、ガーっと上っていくのが3キロぐらい続いて、最後にすごくしんどいのです。心臓破りの坂というような言い方がありますが、まさに最後の最後に絶望的な坂が待っているというコースです。

心臓破りという言い方をしましたけれども、作家の村上春樹さんの『走ることにして語るときに僕の語ること』だったと思いますが、そういうエッセーの本があります。その中で彼は、ものを書くこととマラソンの準備をすることはよく似ている、という話をしている、彼はボストンマラソンなどを走っているランナーでもあります。

その中で心臓についての話があって、マラソンの練習をしていると、心拍数——心臓が1分間に何回ドクドク動かか——が、すごく低くなるらしいのです。心臓が強くなって、ゆっくり動くようになるという話が出てきます。

## 時間のこと

そこからさらに話が横にそれますが、本川達雄さんという生物学者の人が20年くらい前に書いた『ゾウの時間ネズミの時間』という本があります。ゾウはエレファント、鼻の長い大きなゾウです。そしてネズミは、小さな生き物のネズミです。

どういふ本かという、生物学の本ですが、生物のサイズ・大きさと、その生物のいろいろな機能との関係を考えるという本です。その中であったのは、まず心拍数のお話で、ネズミのような小さな生き物は心拍数がすごく高い、というか速いそうです。トットトット、トットトット、と心臓が動いている。一方でゾウのような大きな生き物は、すごくゆっくり、ドン……ドン、というくらいのタイミングで動いているのだそうです。

また別の話で、寿命の話が出てきて、ネズミのような小さな生き物はすごく寿命が短くて、ゾウのような大きな生き物は寿命が長い。その2つを合わせて考えると、トットトット、とすごく速く動いていて短く生きる小さな生き物と、ゆっくり心臓が動いて長く生きる体のサイズが大きな生き物がいる。そういう関係があるという話が出てきます。

逆に考えてみると、物理的に生きる時間はゾウとネズミでは何十年も違いますが、心臓が動く時間で生きた長さを測ってみると、実はそれほど変わらないのではないかという話が出てきます。ちょうど一生の間に心臓が何回動くのかを数えてみると、ネズミでもゾウでもそれほど変わらない。確か何億回か何十億回だったと思いますが、回数はそれほど変

わらないので、物理的な時間ではなく、心臓が動く1回の時間を命の1単位と考えれば、実はゾウもネズミもそれほど変わらない時間を生きているということが、その本の中には出てきました。

一般書、新書として、すごく分かりやすく話をシンプルにして書かれたので、その後、生物学者の人などから、「それほど単純ではない」「例外がたくさんある」と、いろいろな批判が出ましたが、議論というか、もの考えるときの一つのモデルとしては、すごく単純で面白い話だなと思います。

自分たち人間の感覚で考えてみても、例えば子どもの考える時間と大人の考える時間は、何となく時間感覚が違いますよね。子どもの頃は1日がすごく長く感じましたが、大人になると、毎日が目まぐるしく変わっていきます。

小さな体の子どもは、心臓がトットトットと動いて、1日の中でたくさん時間を過ごして長く感じるけれども、大人はゆっくり心臓が動いていて短い時間を生きている。だんだん横道にそれますが、大人と子どもの時間感覚の違いも体のサイズで考えることができるのではないかということも、その本からヒントを得ることができます。

そんな時間ということを考えてみたときに、自分にあとどれくらい時間が残っているだろうかと考えてしまいます。今、私は47歳ですので、先ほど寿命という話がありましたが、日本人の平均の男性の寿命、平均余命を考えてみると、たぶん後ろの半分に来ているだろうなと思います。もしかすると、この後、この教室を出たとたん、雷に打たれて死ぬかもしれないので、たぶん、もうすぐです(笑)。

## いのちのこと

「いのちについて考える」というお題を頂いたときに、「考えたことがあるかな?」と振り返ってみたのですが、正直に言うと、ほぼいのちについては何も考えずに日々生きてきたので、「何を話そうかな」と、ずっと思ってきました。

でも最初に、いのちということで頭に浮かんだのは、とても月並みですが、自分の子どものことでした。私には子どもが2人いますが、夫婦2人で暮らしていて、ある日突然ポンと出てくるわけです。何もなかったのに、なぜここに生き物が出てくるのだろうか。今考えても、とても不思議なことです。

生物学の本の話が出たので、生物学的に考えてみれば、子どもは私と妻の細胞がくっついて、それがどんどん分裂してできていったものなので、ポッと突然何かができたわけではなく、私と妻からできた、と考えることができます。と思います。

私と妻がどうやってその細胞をつくったかという、たぶん私や妻が食べたものがそれになったのでしょう。また子どもがどんどん大きくなって細胞分裂していくのは、その子どもが食べたものが、それになっているのだと思います。

細胞のことを少し調べてみると、例えば皮膚のようなものは、何日間、あるいは何週間かごとにどんどん入れ替わっているので、皮膚だけを考えてみると、3カ月前の私と今の私は、全く違うものでできていると言えるそうです。骨や脳みそや心臓の筋肉などは、なかなか入れ替わらないそうです。成長の途中では、どんどん増えていきますが、いったん成長してしまうと、その後、死ぬまで、ほと

んど変わらない細胞でできているそうです。

従って、そういったものは成長の過程で食べたものでできていて、皮膚などは日々食べたものでできている。そう考えたときに、私がこの手を見て「これは昨日食べたラーメンだ」「こっちは先週食べた鶏肉の皮がこんなところに」とは思わないわけです。もちろん子どもがポイッと生まれてきたときに、「これは3カ月前に食べたステーキだ」「これはこの前あげた粉ミルクが、こんなふうにくっついたな」とは思わないわけです。

すごく話は飛びますが、いのちとは何かと考えたときに、それなのではないかと思ったわけです。ラーメンやステーキではないなと思えるものが、人にとってのいのちなのではないかということです。「何だ、それ」と思われるかもしれません。

つまり、私のほうがたぶん先に死ぬと思えますが、例えば私の妻が死んだとします。死んでも肉体はそこに残っているわけです。日本のやり方だと、焼き場に持っていき、焼いて灰になると思います。灰になっても妻の肉体はそこにあるけれども、「うちの妻だ」と——多少は思うかもしれませんが——「そこに妻が活着ている」とは私は思いませんし、たぶん他の人も思わないと思います。これを見ても思わない部分がある、人のいのちだろうというような考え方です。つまり、その人が肉体ではない部分で残せる何かが人のいのちだろう、ということです。

## 僕が語ること

そのように考えると、例えば私は研究者という職業をやっているの、私のいのちは何

だろうかと子どもに伝えたとすれば、「図書館に行きなさい。図書館に行って、ある本をめくると、私が書いた文章がそこに載っていますよ。」あるいは「インターネットで論文検索をしてもらえれば、私が書いた論文が出てきますよ。」と言うでしょう。紙とインク、もしくはネット上でしたら情報として私の言葉がそこに残っている。肉体はないけれども、私の考えはそこに残っているので、私のいのちがそこにあるのだと思うと、何かすごく楽になる気がします。

また教育者という仕事もしていて、データ分析の話の日々、大学では教えていますから、学生さんたちが、授業を聞いているときは「面白くないな」「難しいな」と思っている、大学の外に出て分析の仕事をしなればいけないときに「これは大学のときに聞い

たな」「あのとき聞いたテクニックが今ここで使える」と思うことがあれば、また私のいのちがそこで残っていると考えることができると思います。

それがいのちだと言われると、そうではない、と思う方もいるかもしれませんが、私は、そのように残せるものがいのちであると、このお話をするきっかけとして思うようになりました。

今日聞いていただいた方には、私がいのちを削って投げた言葉を、すぐなくなりそうな気がしますけれども、いつか「そういえば、あのおっさん、あんなことを言ったなあ」と思って思い出すことがあれば、そこにまた私がポッと生き返ると思います。

(社会学部教授)